

紺紙銀字法華經

八卷

滋賀 延暦寺

指定年月日 重要文化財(昭和三〇・六・二二)

修理年度 平成三・四年度

補助事業者 延暦寺(滋賀県大津市)

修理施工者 宇佐美松鶴堂

第二卷	全長二二・四〇m	一二紙
第三卷	全長一〇・四〇m	一一紙
第四卷	全長九・三九m	一八紙
第五卷	全長一〇・〇二m	一九紙
第六卷	全長九・八八m	一八紙
第七卷	全長九・〇八m	一七紙
第八卷	全長七・九九m	一五紙

(寸法は修理後のもの。見返を含む)

紺紙に銀界を施し、銀字で書写した一具の法華經である。本文の謹言な書風から平安時代中期を下らぬ時期の書写になるものと考えられている。銀字のみで書写した写經の数少ない遺品である。表紙は紺紙に金銀泥の宝相華唐草文様、見返には経意絵を描くが(但し、巻第四のみ、後補の紺表紙)、この表紙・見返絵は二種に分かれ、巻第二、三、五、七は見返絵が金銀泥で描かれているのに対し、巻第一、六、八の見返絵は本文料紙と同じく銀界を施した紺紙に銀泥のみで描いている。銀界料紙を用いたものは、当初の表紙、見返が欠失したため、本經の巻末の料紙を用いて付したものと考えられているが、この二種の見返絵はともに、のちの平安時代後期に盛行する紺紙金字經の見返絵とは構図等に違いが大きく、絵画資料としても貴重である。

修理前の状況

各巻とも過去に数度の修理が施されているが、表紙・見返に傷みが大きく、画面の一部が欠失し、補修紙で補っている。本文の料紙も巻首では劣化がすすんでおり、各巻の巻首の一〜五紙は紺紙で裏打が施されているほか、料紙の天地等に紺紙で補修・補強がされている。これら補強紙・裏打紙が糊離れを生じて本紙が浮いている箇所があり、また補修のない部分で本紙が擦れて薄くなった箇所がある。軸は後補の八角水晶軸、紐は後補の白茶糸で、黒漆の経箱に納めている。

修理の概要

- (1) 各巻とも一紙ずつ解装して、旧裏打紙、繕い紙を除去した。
- (2) 似寄りの紺紙(楮紙、打紙)を作成して本紙の欠損部分を裏面より補修した。表紙、見返は表裏に相剝してそれぞれ欠損を繕って貼り合わせた。

- (3) 各巻首の脆弱化している本紙には、紺紙にて裏打を施した。各

法 量

各縦二八・一cm

第一卷 全長 九・六八m 一八紙

巻の裏打した紙数は以下の通りである。巻一は三紙、巻二は一紙、巻三は三紙及び巻末の一紙、巻四は三紙、巻五は三紙、巻六は六紙、巻七は三紙、巻八は一紙。

(4)、各巻末に紺紙で軸付紙を補った。

(5)、軸首および紐は旧来のものを用いて成巻した。

その他

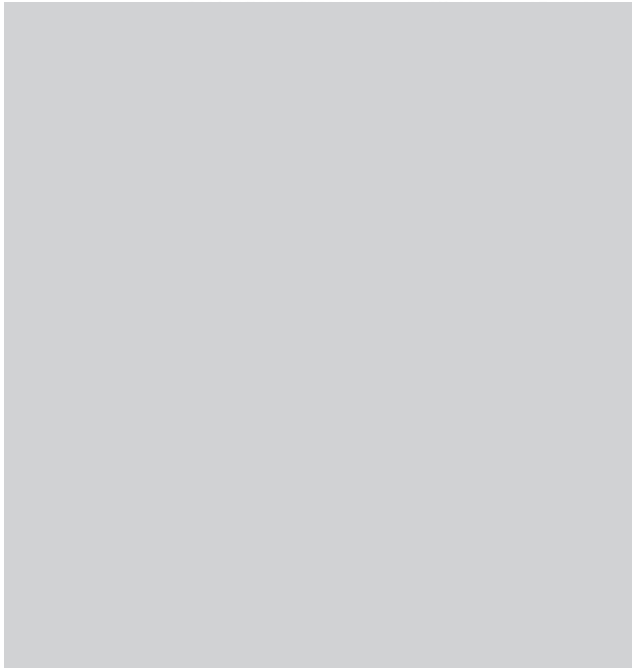
各巻の見返絵の右辺は、過去の修理で多少切りつめられ、また本紙を折って八双を付けていたが、今回の修理では右辺に補修紙を補って、その補修紙の部分に八双を取り付け、見返の本紙の残っている部分はすべて見えるようにした。このため各巻の見返の寸法は修理前より多少広くなった。

また見返絵のうち、巻第六は銀界の料紙に銀泥で描かれているが、右下方に金銀泥で描かれた断片がある。この断片は、周囲の料紙とはつながっておらず、他の巻の見返の一部が混入したものであることが判明した。しかし、本来どの巻のものであるかは明らかでないため、修理前と同様の位置に残し、周囲の本紙と少しの間隔をあけて補修紙でつなげて料紙が別のものであることが分かるようにした。

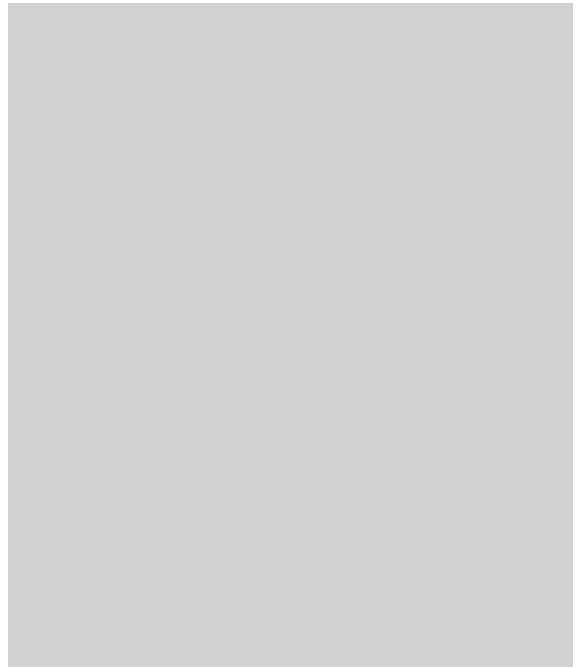
巻第七の見返絵の右下方にも同様に金銀泥絵の小断片があり、これも同じように周囲の料紙と間隔をあけて、修理前と同じ位置に残した。

なお、修理のために本経の料紙を精査したところ、料紙は楮紙で、十分に叩いて密度を高くしたものであることが判明した。このため、補修紙として用いる紺紙も楮紙を打紙したものを用了。

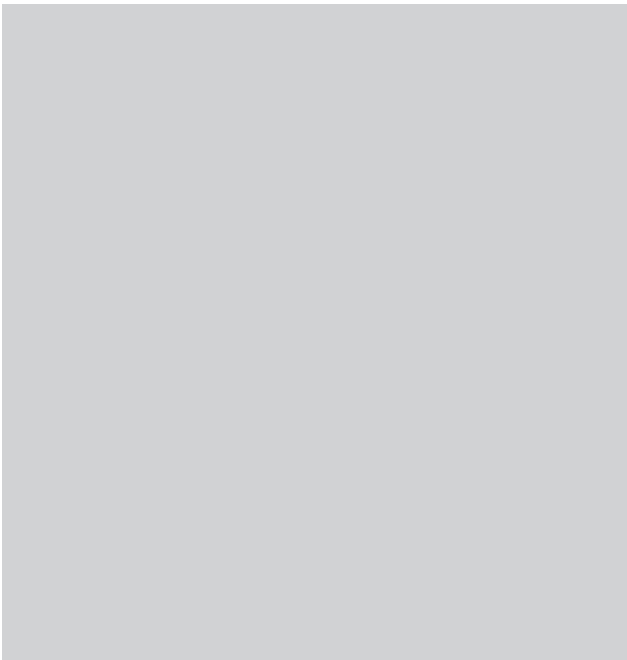
(文化庁文化財調査官 中村順昭)



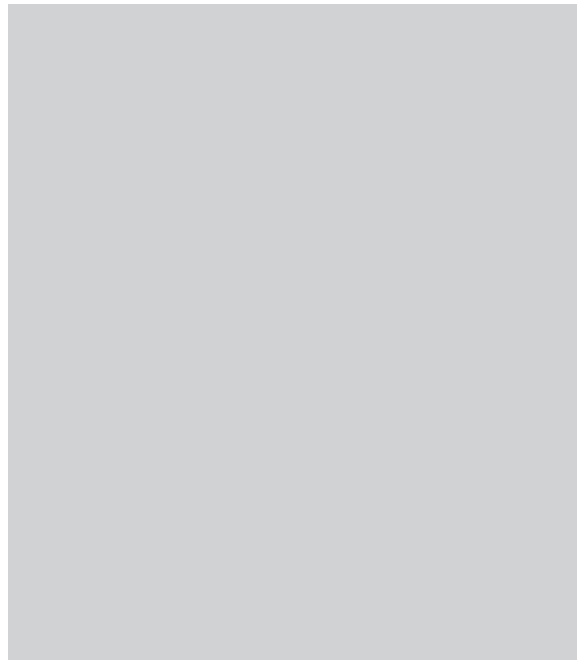
第五卷表紙 修理後



第五卷表紙 修理前



第三卷見返 修理後

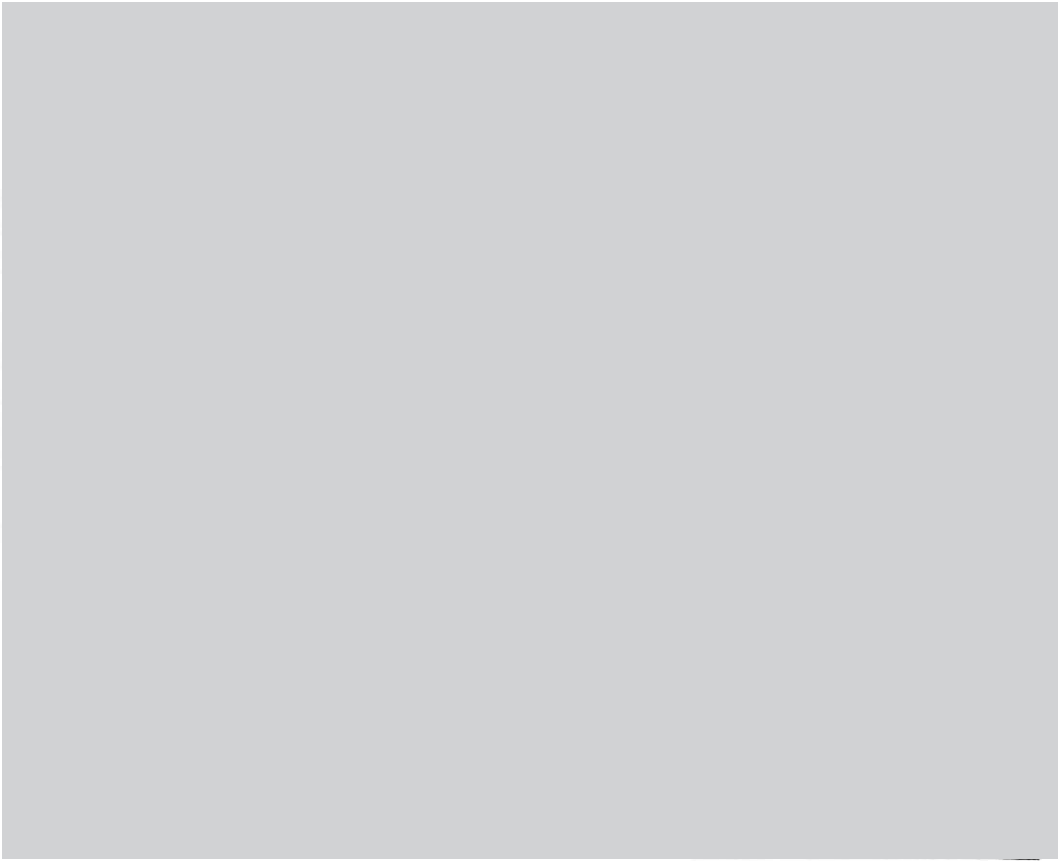


第三卷見返 修理前

紺紙銀字法華經 延暦寺



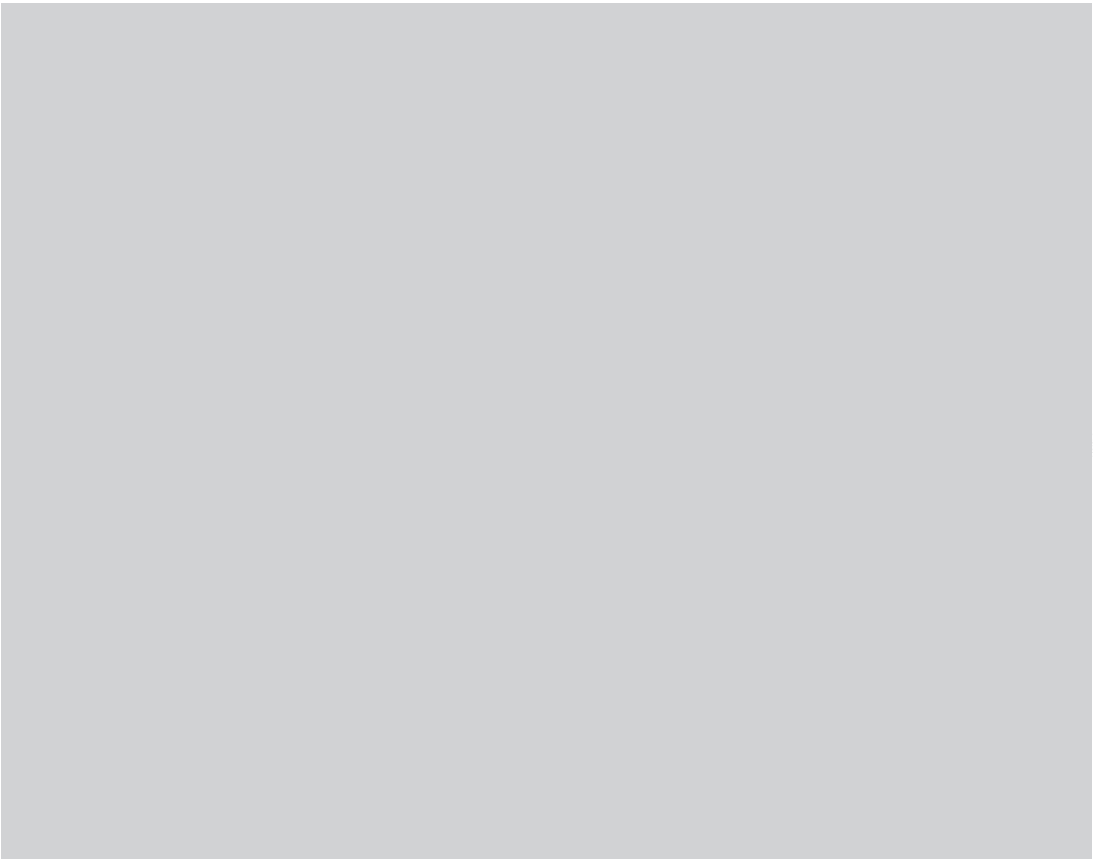
第五卷見返 修理前



第五卷見返 修理後



第六卷見返 修理前

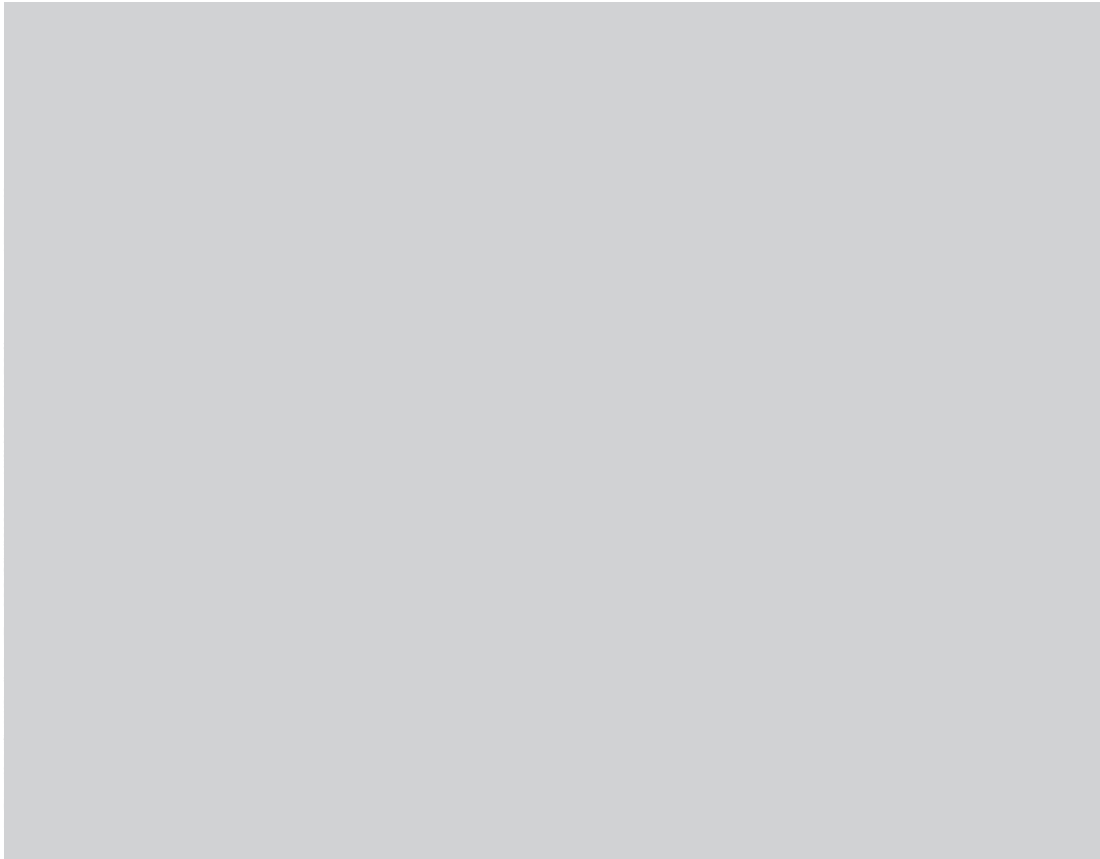


第六卷見返 修理後

紺紙銀字法華經 延暦寺



第七卷見返 修理前



第七卷見返 修理後

紺紙銀字法華經 延曆寺